

キャリア開発学科におけるピア・サポート活動の現状とその効果 —アンケート結果による一考察—

岸川公紀¹⁾ 梶田鈴子²⁾ 有田真貴子³⁾ 大塚絵里子⁴⁾

Current Status and Effectiveness of Peer-Support Activities in the Department of Career Development — A Study by Questionnaire Results —

Koki Kishikawa¹⁾ Suzuko Kajita²⁾ Makiko Arita³⁾ Eriko Otsuka⁴⁾

(2017年11月22日受理)

1. はじめに

1-1 本研究の背景と先行研究

日本における高等機関のピア・サポート活動の活発化の発端は、2000年（平成12年）6月に文部科学省より公表された『大学における学生生活の充実方策について（報告）—学生の立場に立った大学づくりを目指して—』（以下、「廣中レポート」と称す）に始まるといえよう。

この「廣中レポート」では、現代社会における情報化、グローバル化、さらには進学率の上昇における多様な学生の入学といった、大学・短期大学を取り巻く環境を挙げ、今日の大学・短期大学における学生の教育への責任の重要性について述べている。すなわち、今日の大学・短期大学は、「教員中心の大学」から「学生中心の大学」へと視点の転換を図るべきだとされており、学生への教育の効果をあげる方策として、学生の活用が述べられている¹⁾。

ピア・サポート活動は、「報償のあるなしに関わらず、同じ学生（peer）同士が専門性を持つ教職員の指導（supervision）のもと、仲間同士で援助し、学びあう制度（プログラム）」²⁾とされる学生の活用の一つである。

2015（平成27）年に実施された日本学生支援機構の調査の中で、ピア・サポート等、学生同士で支援する制度の実施状況によれば、大学では総回答数754件のうち49.3%、短期大学では総回答数322件のうち22.7%が実施していると回答している。これは、前回の2013（平成25）年の調査よりも約5%上昇している。さらに、ピア・サポートを実施していない学校のうち今後「実施したい」と考えているのは、大学全体では40.6%、短期大学全体では31.8%となっている。そして、ピア・サポートの今後の取り組みについて、「拡充したい」としているのは、大学全体で61.6%、短期大学全体で57.5%にもものぼっている。

このピア・サポート活動は、1992年より制度化された立命館大学の「オリター・エンター活動」³⁾があるものの、そのほとんどが「廣中レポート」に触発されたように、取り組みが活発化している。

この取り組みの具体例としては、2000年に設置された広島大学の「ピア・サポート・ルーム」⁴⁾、2004年からの名古屋大学の「ペア相談」⁵⁾、2003年に設立された愛媛大学の「スチューデント・キャンパス・ボランティア（SCV）制度」⁶⁾、2007年に始まる法政大学の「Peer Support Community（PSC）制度」⁷⁾がある。これらは、全学的な活動として取り組まれており、この活

別刷請求先：岸川公紀，中村学園大学短期大学部キャリア開発学科，〒814-0198 福岡市城南区別府5-7-1

E-mail：kishi-k@nakamura-u.ac.jp

1) 中村学園大学短期大学部キャリア開発学科准教授 2) 中村学園大学短期大学部キャリア開発学科教授

3) 中村学園大学短期大学部キャリア開発学科元助手 4) 中村学園大学短期大学部キャリア開発学科助手

¹⁾ 文部科学省（2000）Ⅱ各大学における改善方策—学生に対する指導体制の充実を目指して、1 人的資源の活用、（2）学生の活用。

²⁾ 沖裕貴（2015）6頁。

³⁾ 寺本憲昭・伊藤昭・伊藤則男・中村成夫（2007）、川那部隆司（2016）。

⁴⁾ 内野梯司・石田貴洋・三浦寿秀・栗田智未・兒玉憲一（2013）。

⁵⁾ 杉村和美・小倉正義・加藤大樹・松岡弥玲・山田奈保子（2006）。

⁶⁾ 泉谷道子・山田剛志（2013）。

⁷⁾ 川那部隆司（2016）。

動の内容は、学生相談活動、修学支援、新入生支援の3つがあるとされる⁸⁾。

そして、ピア・サポート活動の効果について、鳥越(2013)は、サポートする側の成長として、大学に関する知識の増大と活動に関わる知識の確実化としての特定の知識面の成長と、コミュニケーション能力の向上、コミュニケーションスキルの向上と心理的発達の促進、そして活動を通して自信をつけエンパワーメントされるという社会性に関わる側面の成長の2側面を挙げている⁹⁾。特に、ピア・サポート活動の社会性に関わる側面の成長は、経済産業省が提唱した「社会人基礎力」を促す取り組みであることから、重要性の高いものであるといえる。そして、近年、ピア・サポート活動の主たる目的のうち、学修支援についても活発化してきている¹⁰⁾。

1-2 本研究の目的と位置づけ

現在、中村学園大学短期大学部キャリア開発学科(以下「本学科」という)では、様々なシーンにおいてピア・サポート活動を展開している。それを分類的に挙げてみれば、学生相談活動として、オープンキャンパスにおける高校生への相談の活動、新入生支援としての入学前教育(プレカレッジ)におけるグループ活動や宿泊研修における企画から運営にかけての企画委員の活動、修学支援として、科目「コンピューター基礎演習A」・「コンピューター基礎演習B」や科目「基礎簿記」・「実用簿記」での活動がある。

この取り組みが、前述したピア・サポート活動と違う点は、全学的な取り組みではなく学科内の取り組み、あるいは一教員の取り組みという小規模な活動であるということである。このことは、活動内容、指導方法、および財政的にも制約があることを意味している。しかしながら、ピア・サポート活動の重要性から、これからも様々なピア・サポート活動が誕生してくることが予想される。それは、本学科が取り組んでいるような小規模な活動もまた多く誕生すると考えられる。

それでは、本学科の活動は、前述した全学的なピア・サポート活動と同じような効果が得られているのであろうか。さらには、先行研究のほとんどがサポーター側の成長について述べられていた。それでは、サポートを受ける側は、どうであろうか。むしろ、ピア・サポート活動は、サポートを受ける側への効果を目的として実施しているわけであるが、本当にその目的は達成されている

のであろうか。そこで、本学科におけるピア・サポート活動の中から、宿泊研修での活動と科目「基礎・実用簿記」での活動に関してアンケートを実施した。

そこで、本稿の目的は、本学科が実施しているピア・サポート活動の取り組みを概観し、その効果を考察することで、ピア・サポート活動は、規模の大小にかかわらず、学生の成長を促し、有用であることを示すことにある。

2. 本学科でのピア・サポート活動の取り組みと教育的ねらい

本学科では、様々なピア・サポート活動が実施されている。その活動についての導入の目的、導入の経緯、並びに活動内容について述べていきたい。

2-1 学生相談活動としての取り組み

2-1-1 オープンキャンパスにおける高校生との面談活動

①導入の目的：入学を希望する高校生が、年齢の近い在校生へ相談することにより親近感が湧き、本学科の理解をより深めてもらう。

担当した学生は、今までの自分の学生生活を振り返り、わかりやすく説明するといったプレゼンテーション能力の向上と、今後の自己の行動を考える機会を得る。

②導入の経緯：本学科は、以前より上記の目的で学生相談を配置し実施してきた。

③活動内容：2年生のゼミナールから2名程度のサポーターをつのり本学への進学希望者への案内・受付、および進学相談をしている。

2-2 新入学生支援としての活動

2-2-1 入学前教育(プレカレッジ)での活動

本学科では、入学予定者への入学前教育として、12月と3月の2回にわたってプレカレッジを実施している。それは、前半が90分の一斉講義で、後半90分がグループ活動となっている。このグループ活動においてピア・サポート活動を実施している¹¹⁾。

①導入の目的：入学予定者が、年齢の近い先輩と直に会話することで、大学教育及び学生生活への理解を深めるとともに、学生生活の不安を解消する。

サポーターは、入学予定者と会話することで、コ

⁸⁾ 大石由起子・木戸久美子・林典子・稲永努(2007)。

⁹⁾ 鳥越(2013)では、この2側面を示す際に、宮尾(2006)、中出(2003)、中出(2004)、伊東(2007)の論文を示しながら挙げている。

¹⁰⁾ 中里陽子・吉村裕子・津曲隆(2015)。

¹¹⁾ 岩田京子・酒見康廣・浦川安宏・大塚絵里子(2015) 208頁。

コミュニケーション能力の向上とリーダーシップ能力を身につける。

- ②導入の経緯：学科内で初年次教育の見直しが行われ、2013（平成25）年度より入学前教育として実施していたプレカレッジの中にチーム活動を取り入れるようになった。そして、上記の目的で、ピア・サポート活動を導入した。
- ③活動内容：プレカレッジにおける、グループ活動で、選抜された新2年生の12名ないし14名が、グループ学習の際の助言や手本として、さらにはグループ活動の進行を円滑化させる役割をもたせて活動している。

2-2-2 宿泊研修での活動

本学科では、新生を対象として、教職員とふれあい、多くの同級生と接し、中村学園大学短期大学の「建学の精神」の理解を深めるとともに、学校に早く慣れ、大学教育及び学生生活に希望と勇気を持たせる目的で、1泊の宿泊研修を実施している。宿泊研修を実施するにあたっては、1年生と2年生による企画委員会を設けて実施にあたらせている。なお、このサポート体制を示せば、図1のようになるであろう。なお、この宿泊研修に関しては、サポーターのことを企画委員と呼んでいるので、この取り組みでは、企画委員に統一したい。

- ①導入の目的：サポートを受ける者にとっては、同学年あるいは先輩の企画委員を通して、参加者全員の一体感が高まり、研修がスムーズに進行することで、宿泊研修の目的を達成すること。

1年生の企画委員は、同級生や上級生との話し合いと企画運営を通して、自己表現の方法、充実感・達成感、コミュニケーション能力の向上、リーダーシップ能力を身に付けさせること。

2年生の企画委員は、下級生との話し合いと企画運営の補助をすることで、良好な人間関係構築のための能力と企画の充実感・達成感を実感させること。

- ②導入の経緯：初年次教育の見直しにより、2013（平

成25）年度より宿泊研修についても学生に企画運営の一部を任せることとなった。そのため、企画委員会を設置し、その助言者として2年生を配置することとなった。

- ③活動内容：1年生の企画委員の役割は、宿泊研修のイベントの企画・運営であり教職員の指導の下、2年生の企画委員の助言により、企画委員会として、4回程度の打ち合わせ会を開いている。

2年生の企画委員の役割は、企画委員会並びに宿泊研修での、1年生の企画委員へのアドバイスや、補助をすることである。

2-3 学修支援としての活動

2-3-1 「コンピューター基礎演習A」・「コンピューター基礎演習B」における活動

- ①導入の目的：授業の学習者は、同じ科目を学習してきた上級生というSA（Student Assistant）から教えてもらうことで、学習時の悩みの共有化により、課題の解決方法のスムーズな理解と定着を図る。

SAにとっては、一度体験した学習内容の深化と下級生の学習をスムーズに導くといったリーダーシップ的資質及びコミュニケーション能力の向上を図る。

- ②導入の経緯：カリキュラムの改定に伴い、平成26年度前期より情報に関する授業のコマ数が増加したため、当初助手2名により担当していた授業のサポートを、助手1名とSA2名が担当することになった。

- ③活動内容：SAは、在校生オリエンテーション時に希望者を募集し、新学期になってから該当科目の実施仕官に授業が入っていない2年生を採用している。現在は、「コンピューター基礎演習A（60コマ）」、「コンピューター基礎演習B（60コマ）」において採用されている。その役割は、授業中における教員のサポートであり、学生がわからないところや進度が遅れている者への支援を行っている。

2-3-2 「基礎簿記」・「実用簿記」での活動

「基礎簿記」・「実用簿記」という授業の校時にピア・サポート活動を実施している。そのサポート体制を示せば、図2のようになるであろう。

- ①導入の目的：受講者の中の簿記の初学者は、同級生といった友人から教えてもらうことで、質問のしやすさと解法の受け止め方がスムーズとなり、学習の内容の理解と定着を図る。

サポーターとしての有資格者は、すでに学習している内容を教えることで、簿記の内容を復習すると同時に、教えるために内容を深く考えることで、学習の深化が図れる。

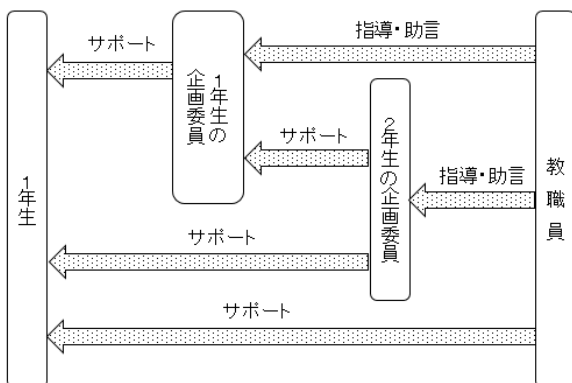


図1 宿泊研修におけるサポート体制

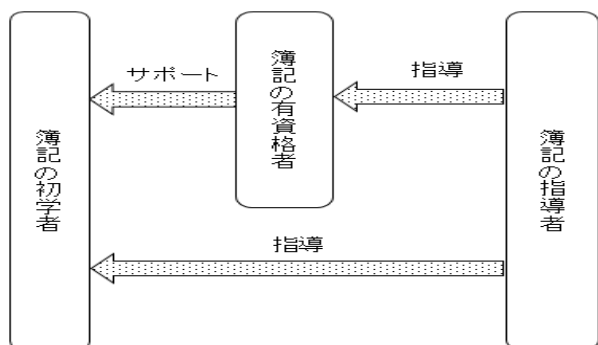


図2 簿記学習におけるピア・サポート活動の体制

- ②導入の経緯：この科目は、講義中心の科目であるが、その中で演習問題により知識及び技術を定着させている。この演習を解かせる際に、一人の教員による机間巡視だけの指導だけでは、全員の理解を深めるには時間がかかっていた。しかし、受講者の中には、すでに簿記の知識及び技術を習得している有資格者が存在していた。そこで、2016（平成28）年より演習問題を解く際に、有資格者を中心として自由に席を移動しての教え合いの時間を設けている。
- ③活動内容：講義の内容を理解している有資格者がサポーターとなり、簿記の初学者を教えるという形式である。演習問題を解く時間は、学生は自由に教室内を移動し、サポーターの周りに初学者が集まって教わったり、サポーターが解法に悩んでいるところに向かい教える等の活動をしている。

3. ピア・サポート活動における効果

前節において、本学科が実施しているピア・サポート活動についての概要と、活動の目的、導入の経緯、活動内容について概観してきた、ここではその効果について述べてみたい。

3-1 新入学生支援としての活動の効果

3-1-1 入学前教育（プレカレッジ）での活動の効果

プレカレッジを体験した入学予定者を対象としてアンケートを実施している¹²⁾。その結果の自由記述により分析を試みる。

アンケートによれば、「先生や先輩が、とても親切だった（6名）」、「丁寧な説明でとてもわかりやすかった」、「先輩がやさしかった」、「入学するのが楽しみになった」、「先輩から話を聞くことができてよかった」、「緊張していたけど、いろんな話が聞けてよかった」、「在校生の方々から話を聞けたり、おじぎの仕方をなら

えてよかった」、「在校生の人たちも元気よく、雰囲気よかった」、「担当してくださった先輩がとても親切でした」という意見があった。このことは、年齢が近い先輩と接することで、不安がなくなり、本学科の理解にも貢献していると考えられる。

3-1-2 宿泊研修での活動の効果

宿泊研修に関しては、性質の違うサポーターが2種類存在する。すなわち、1年生のサポーターと2年生のサポーターである。平成29年度に、活動の効果をみるために、企画委員に対してアンケートを行った。調査対象は、1年生の企画委員16名と2年生の企画委員8名である。

(1) 1年生の企画委員に対する効果

1年生の企画委員16名に対してアンケートに答えてもらった。

- ① 企画委員として会議に参加して、よかったこと悪かったこと

ここでは、すべて記述式で答えてもらっている。文章から読み取れる内容について分析を試みた。なお、文章での回答のため内容が2つ以上読み取れる場合がある。

企画委員会での企画委員としての活動についてよかったところを問うてみた。その回答の内容を分析してみると、交流の活性化に関するものが10件、達成感の喜びに関するものが3件、自己の能力（協調性の不足、積極性の不足）の認識に関するものが2件あった。このことから、1年生の企画委員は、委員会に参加することで、今まで知らなかった同級生とのふれあいを通じて、仲間意識が生まれ、友達ができたことが一番よかったと答えている。

- ② 企画委員会に参加して自分がかわったと思うところ

ここでは、「対人関係がうまくできるようになった」、「自分の意見が言えるようになった」、他人の意見を聞けるようになった、「グループで実行する喜びがわかった」という4つの項目について、選択してもらったところ図3のようになった。

さらに、その他に変わった点があったらという自由記述を見てみると、「皆の前にたたりすることは緊張していたけれど前より少し自信がもてた」、「人前に立つことが苦手だったけど少しできるようになったと思う」というコミュニケーションの基礎ともいえるべき能力についての回答や「いろいろな人と話せて、視野が広がった」、「誰かの指示のサポートにまわること

¹²⁾ 岩田京子・酒見康廣・浦川安宏・大塚絵里子（2015）210-211頁。

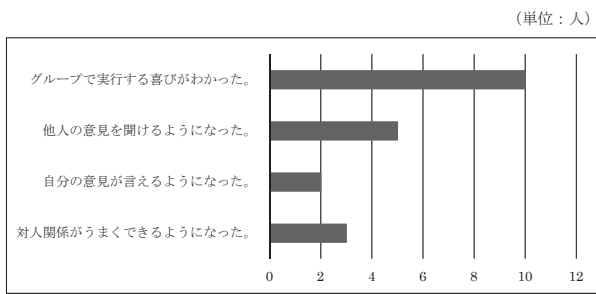


図3 企画委員会に参加して変わった点

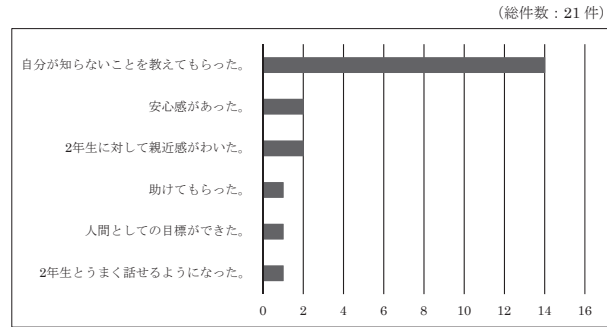


図4 1年生からみた2年生の企画委員について

の大変さを知って動けるようになった」とする直接的なコミュニケーションではなく、良好な人間関係を築くための能力に関する回答があった。

③ 宿泊研修に企画委員として参加してよかったところ、わかったところ。

自由記述で回答をしてもらった。ゆえに、文章の中に複数の内容が読み取れるものがある。結果をみれば、よかったとこたえたのが12件、わかったと答えたのが3件である。

アンケートの記述から読み取れるものは、よかったと答えたのが、自らが企画したイベントを同級生が体験して喜んでくれたり、自分たちが役割を担うことで同級生と友人になれたりとする「貢献することの喜び(7件)」が一番多く、次に「達成感の喜び(2件)」、「交流の活発化(2件)」、「性格(行動力、時間厳守)の変化(2件)」が続いている。なお、悪かった点は、「自分で考えて行動できなかつた」、「恥ずかしかつた」、「いそがしかつた」とする3件であつた。

④ 宿泊研修で身についたもの

これについても自由記述で回答をもらつた。延べ13件の内容が読み取れる。それによると、「積極性が身に付いた(7件)」が一番多く、ついで「心配りができるようになつた(2件)」、「自信が付いた(2件)」となる。他にも「苦手なタイプの人ともがんばつて話そうとした」、「急な出来事にも落ち着いてできるようになつた」などの回答もあつた。

(2) 1年生の企画委員から見た2年生の企画委員について

次に、1年生の企画委員は、2年生の企画委員とともに行動してみてもどのように感じたのであろうか。アンケートの結果をみてみたい。

① 1年生からみた2年生の企画委員について

この質問に対しても自由記述で答えてもらつた。その結果、図4のようになつている。なお、自由記述での回答も加えているので、内容が複数含まれており、

総件数は21件となつている。

図4によれば、1年生の企画委員が2年生の企画委員と接したときの一番の感想は、企画する際にスムーズに進行できるように、アドバイスを受けてたり雰囲気をつくってくれたりと支援してくれたことである。このことは、2年生を1年生のサポーターとして設定した意図どおりの結果となつた。なお、その他にも、「2年生になつたときの自分の目標ができた」と回答したものもいた。

② 宿泊研修に2年生が参加していることで、自分(1年生の企画委員)が変わつたところ

1年生の企画委員にとつた自由記述式のアンケートによつて、その内容を分析してみると、「短大での目標ができた(5件)」、「自立心が芽生えた(2件)」、「意見を聞くことができた(1件)」、「コミュニケーション能力が付いた(1件)」、「積極性が出た(1件)」であつた。

1年生の企画委員は、宿泊研修を実施する際に2年生がいることで、今後の本学科での生活における目標を見出だしたことを一番に挙げている。身についた能力としては、先輩に負けたくないという「自立心が芽生えた」り、先輩を見習つて「積極性がつき」、「他人の意見をきけるようになった」りと、「コミュニケーション能力が身に付いた」ようである。

(3) 2年生の企画委員としての活動

それでは、2年生は企画委員として、この活動に参加することで何を感じ、何が成長したと考えているのであろうか。対象は、2年生の企画委員の8名である。

① 企画委員会に参加してよかったこと、悪かつたこと

ここでも自由記述により回答を求めた。総件数は10件である。そこで、自由記述の文章を読み取つてみると、2年生の企画委員は、「企画委員がどうやってみんなのために動いてたのか」、「裏では、いろいろしてくださつてた」という「役割の再認識(3件)」がもっとも多く、「1年前を思い出した」、「視野

が広がった」、「同年あるいは後輩とはなすことができた」、「先生に覚えてもらった」とする企画委員がいた。

② 2年生が考える企画委員会に参加して、身についた能力。

自由記述の文章を読み取れば、次の4つのことが書かれていた、総件数は、5件である。それは、「全体を見る力」、「コミュニケーション能力」、「積極性」、及び自己行動の再認識であるとする。

③ 宿泊研修に2年生の企画委員として参加して、身についた能力

ここでも自由記述の文章の中から、身に付いた能力について読み取ってみると、「積極性がみに付いた（2件）」、「対応がわからなかった（1件）」、「責任感が身に付いた（3件）」であった。

3-2 学習支援としてのサポート活動

3-2-1 「コンピューター基礎演習A」・「コンピューター基礎演習B」の活動

この科目のピア・サポート活動について、アンケートは特に実施していない。しかしながら、授業アンケートの中にサポーターに関する記述があった。この記述された文章より、サポート活動の効果を読み取ってみたい。それは、「助手の先生と先輩方が見回ってくださったのがとても助かりました。パソコンは難しいですが、勉強して覚えればできるようになると思うので、今後もしっかりがんばりたいです。ありがとうございました」という記述がみられる。

このことから、本科目のピア・サポート活動は、先輩が質問しやすいために、科目の内容の理解に繋がっており、学習意欲が増しているといえる。

3-2-2 科目「基礎簿記」・「実用簿記」

科目「基礎簿記」・「実用簿記」において、ピア・サポート活動はどのような効果があるのだろうか。そのことを知るために、平成29年度の授業最終日にアンケートを実施した。対象者は138名であり、有資格者は24名、未取得者は114名である。

まず、簿記検定の有資格者と未取得者は、教える側にあったのかそれとも教わる側にあったのかを回答してもらった。その結果が、図5である。

これをみると、有資格者は教える側を担当している。これは、当然のことであろう。しかし、講義が進むうえで、114名中2名ほどが未取得者ながら、教える側に移った者もいた。

さらに、教える側として分かったおとの回答は図6のようになっている。

図6において、教える側の者は、まず他人に「教えることの難しさ」を感じ取っている。そして、次に「教えることで簿記の理解が深まった」となる。さらに、「覚えているつもりが忘れていた」、「相手がわかりやすいように何度となく言い換えた」が順につづく。

これらから、教える側は、このピア・サポート活動を通して、まずコミュニケーションの難しさを理解し、相手に理解させようとするところから、コミュニケーション力をつけるために努力していることが、うかがえる。さらに、すでに学んだ内容を再び学習しなおしており、これは、学習内容の定着に役だっていると考えられる。

次に、教わる側はどうであろうか。アンケート結果は、図7のような結果となった。

教わる側としては、「教えてもらったことで感謝の心がでてくる」が一番高い。次に「友達に教わることで理解が深まる」と続く。これは、学習内容の理解はさておいて、学生が困難に直面し、それを協力しながら学習することで、同級生間に感謝の気持ちが広がり、一体感を持つに至ったと考えられる。そして、それゆえに学習内容の理解が深まったと考えられる。この「感謝の心」に「教えてもらうことは大変だと感じる」、「信頼関係」を加えれば、57.3%にもなる。

なお、このピア・サポート活動は、授業の中で学習内容の理解と定着がねらいであるが、教わる側の成長に焦点を当てると、前述したことに加えて、「次回は教えてもらわないように努力する心が芽生える」ことにも注目される。

しかし、このピア・サポート活動にもデメリットが存

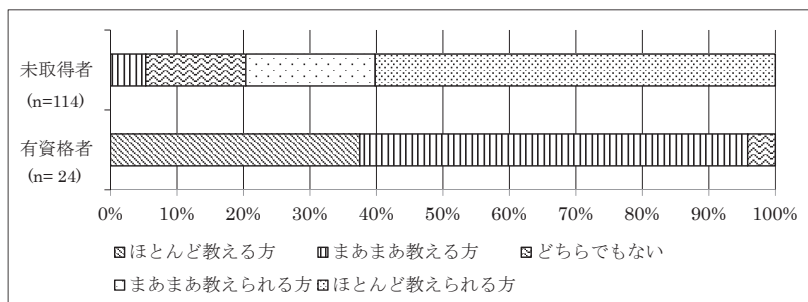


図5 未取得者と有資格者の役割

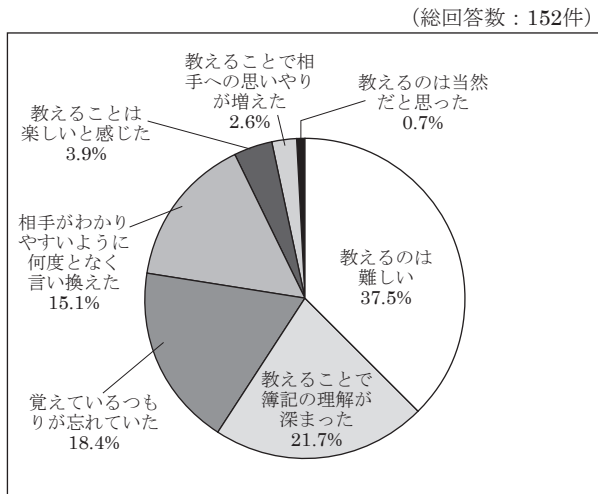


図6 教えることでわかったこと

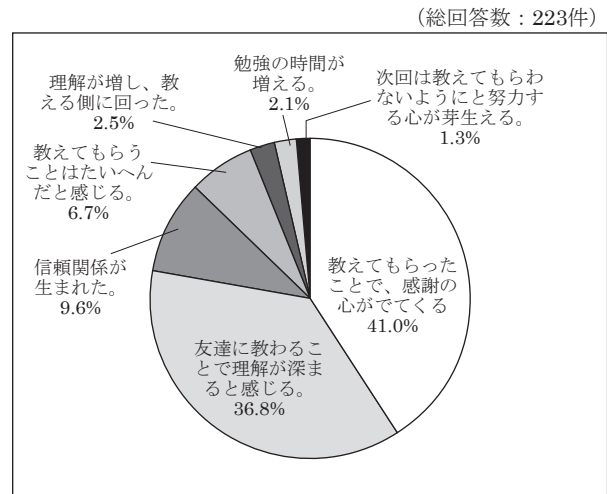


図7 教えてもらうことでわかったこと

在した。その結果は図8に表れている。

たしかに、「楽しい」、「学生同士の信頼が深まる」、「勉強に集中できた」とするメリットが高いが、友人同士の教え合いのため、学習内容が、つい違う話に発展する可能性があり、「勉強以外のおしゃべりが多い」こととなり、そのために「勉強に集中できない」と回答をしたものがあることは、実施する際に、時間を短く区切ってメリハリをつくるなど、工夫が必要であろう。なお、「講義よりも理解が深まった」とする者が23%いることは、このピア・サポート活動の目的に合致していることになる。

4. 結びとして

ここまで、本学科で実施しているピア・サポート活動について概観し、その効果について述べてきた。そこでは、ピア・サポート活動を実施することで、各イベントの目的が達成されていることはもちろんであるが、ここでは、ピア・サポート活動におけるサポートを受ける側、サポートする側の人間的な成長に焦点を当て考察することで結びとしたい。

まず、プレカレッジにおける入学予定者は、ピア・サポート活動によって、先輩を身近に感じ、大学生活への安心感と、本学科への理解を得ていた。すなわち、短期大学に関する知識が増えていた。

次に、宿泊研修においては、1年生の企画委員は、グループで活動する喜びや他人の支えになって貢献する喜びなど、協調性やコミュニケーションに必要な資質を身に付けるとともに、活動をすることで自信を持つことができ、人前に立つことができるようになるなど、人間的な成長が見受けられた。さらに、1年生の企画委員は、2年生の企画委員がいることで、短大での目標ができた

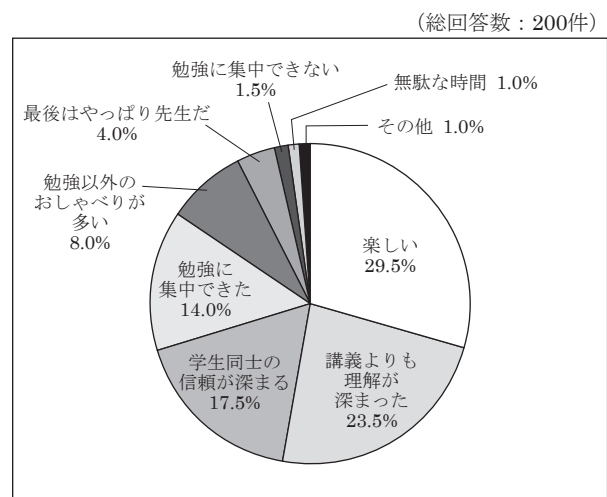


図8 教え合いのメリットとデメリット

り、自立心が芽生えたりと、更なる成長が伺える。

さらに、2年生の企画委員は、全体をみる力、積極性、責任感の向上、並びにコミュニケーション能力の向上により、リーダーシップ的能力が身に付いたようである。

そして、授業内での活動では、サポートする側は、他人に教えることにより、コミュニケーションの難しさを知り、コミュニケーションをするための努力をしていることがわかった。さらに、サポートをされる側は、感謝の心が芽生えるとともに信頼関係の大切さを知ること、協調性及びコミュニケーションをとるための心構えが身に付いてきたと考えられる。

以上のことにより、先に述べたピア・サポート活動の全学的な取り組みによる知識面での成長と社会性に係わる側面の成長は、本学科の取り組みでも見られると考えられる。すなわち、ピア・サポート活動は、規模の大小に係わらず、学生の成長に有効であると考えられる。さ

らには、サポートする側だけでなく、サポートされる側も成長が見られるのである。

今後とも、本学科の様々な場面で、ピア・サポート活動の充実が図れるよう、検討を加えつつ実施していきたい。

<参考文献>

1. 文部科学省 (2000), 『大学における学生生活の充実方策について (報告) - 学生の立場に立った大学づくりを目指して -』, 文部科学省。(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/00061.htm: 2017年 8月5日現在)
2. 青山巧・長澤郁夫・池山圭吾・福岡敏之・小川巖 (2010), 「新入生セミナーにおける学生の活用と成果-ピア・サポート活動と体験学修の高まり-」鳥根大学『教育臨床総合研究』第9号, 1-7頁。(2010-06-30)
3. 足立由美 (2014), 「学生相談体制におけるピア・サポートの再検討」『金沢大学保健管理センター年報・紀要』第6号 (通巻40号), 78-80頁。(2014-03)
4. 泉谷道子・山田剛志 (2013), 「体系的なピア・サポート活動による学生の学びと成長」『大学教育実践ジャーナル』第11号, 61-67頁。
5. 岩田京子・酒見康廣・浦川安宏・大塚絵里子 (2015), 「本学科の初年次教育プログラムの改定-1年目の実践報告-」中村学園大学・中村学園大学短期大学部『研究紀要』第47号, 203-216頁。
6. 内野悌司・石田貴洋・三浦寿秀・栗田智未・兒玉憲一 (2013), 「広島大学ピア・サポート・ルームの活動評価についての考察-2011年度活動の Empowerment Evaluation を通じて-」『総合保健科学: 広島大学保健管理センター研究論文集』第29号、13-23頁。
7. 大石由起子・木戸久美子・林典子・稲永努 (2007), 「ピアサポート・ピアカウンセリングにおける文献展望」, 『山口県立大学社会福祉学部紀要』第13号, 107-121頁。
8. 大石由起子・林典子・稲永努 (2010), 「大学における新入生支援としてのピアサポート活動-立ち上げの2年間をめぐる考察-」, 『山口県立大学学術情報』第3号, 29-44頁。
9. 沖裕貴 (2015), 「「学生スタッフ」の育成の課題-新たな学生参画の 카테고리 を目指して-」『名古屋高等教育研究』第15号, 5-22頁。
10. 小貫有紀子 (2011), 「ピア・サポートの現状と課題-ピア・サポートの拡大と多様化」日本学生支援機構学生生活部『学生支援の現代的展開-平成22年度学生支援取組状況調査より』大学等における学生支援取組状況調査研究プロジェクトチーム報告書, 63-77頁。
11. 春日井敏之 (2009), 「大学におけるピア・サポート活動-新入生支援, インターンシップ, 授業の試み」, 『ピア・サポート-子どもとつくる活力ある学校 (現代のエスプリ No.502)』, ぎょうせい, 130-139頁。
12. 川那部隆司 (2016), 「立命館大学におけるピア・サポート団体間の連携を促す試み-課題と展望-」, 『立命館高等教育研究16号』, 55-64頁。
13. 杉村和美・小倉正義・加藤大樹・松岡弥玲・山田奈保子 (2006), 「ペア相談と学生の主体性を取り入れた大学でのピア・サポート活動」, 『青年心理学研究』第18号, 51-62頁。
14. 寺本憲昭・伊藤昭・伊藤則男・中村成夫 (2007), 「学生活動の効果検証-オリター活動 (上級生による新入生支援組織) をケースに-」, 立命館大学『大学行政研究』第2巻, 133-146頁。
15. 鳥越ゆい子 (2013), 「K女子大学のピア・サポート活動における学生の成長-ピア・サポーターの成長に注目して-」, 『帝京科学大学紀要』第9号, 44-56頁。
16. 中里陽子・吉村裕子・津曲隆 (2015), 「授業時間内の学生支援活動による学生の成長メカニズムに関する予備的研究」, 『アドミニストレーション』第21巻第2号, 91-130頁。
17. 中出佳操 (2003), 「大学生によるピア・サポート活動とその意義」, 『人間福祉研究』第6号, 85-99頁。
18. 中出佳操・今野礼子・青池美紀・川村道夫 (2004), 「学生相談の現状とピア・サポート活動の活用に関する研究」, 『北海道浅井学園大学短期大学部研究紀要』第42号, 227-234頁。
19. 日本学生支援機構 (2017), 『大学等における学生支援の取組状況に関する調査 (平成27年度)』集計報告 (単純集計), 日本学生支援機構。
20. 早坂浩志 (2010), 「ピア・サポートへの取り組み」, 日本学生相談学会50周年記念誌編集委員会『学生相談ハンドブック』, 学苑社, 196-201頁。
21. 宮尾正樹 (2006) 「事例紹介 学生同士で支援の論をつなぐ-お茶の水女子大学文教育学部のピアサポート・プログラム」, 『大学と学生』第29号, 42-47頁。
22. 吉田博 (2013), 「学生が参画する教育改善・学生支援活動の効果検証に関する一考察-徳島大学学生チーム「繋ぎ create」の事例から-」『大学教育研究ジャーナル』第10号, 9-20頁。